

日本一の夕陽 フォトコンテスト 入賞作品



金賞

「渡り方教室」

室谷 鋭一 (北海道留萌市)
撮影場所：寿町建設会館前



「灯台と船灯跡」

坂井 盛二 (北海道留萌市)
撮影場所：大町旧出光タンク前



金賞

「落陽」

布施 真澄 (北海道岩見沢市)
撮影場所：北海道留萌市留萌港



「夕日の丘」

内田 国男 (静岡県西伊豆町)
撮影場所：静岡県賀茂村黄金崎



「爆煙すずらん号」
渡辺 一夫 (北海道留萌市)
撮影場所：峠下SLすずらん号

第2部 入選作品 留萌市内で撮影した 「留萌の良さ=名所・イベント」



「夏の終焉」
江部 勝利 (北海道留萌市)
撮影場所：千望台より春湧まり花火大会



「ほほえむ2人」

田澤 康史 (北海道奈井江町)
撮影場所：留萌駅SL撮影会



「岬の夕景」

桶川 久子 (北海道赤平市)
撮影場所：黄金岬



「金色(こんじき)の空」

近江美智子 (北海道留萌市)
撮影場所：平和台より礼受牧場

銀賞



「光芒」

東山 昌弘 (滋賀県長浜市)
撮影場所：滋賀県彦根市



「夕陽の影」

田辺 信一 (東京都)
撮影場所：東京都不忍池

第1部 入選作品 国内で撮影した 「夕陽・夕景」



「風波落日」

渡辺 一夫 (北海道留萌市)
撮影場所：北海道留萌市黄金岬



「暮色の漁港」

相良 見行 (神奈川県横浜)
撮影場所：神奈川県長井市荒崎漁港

銀賞

▼平成9年度に「宇宙一の夕陽フォトコンテスト」と題して始まったこの企画。平成10年度から「日本一の夕陽フォトコンテスト」と改名されて2年目をむかえた今回、第一部作品(国内で撮影した夕陽・夕景)と第二部作品(留萌市内で撮影した留萌の良さ=名所・イベント)を合わせ878点の応募がありました。

応募作品は、写真家の秋山亮二氏によって審査され、入賞作品が決定しました。それでは、今回のコンテスト及び各部門に対する秋山氏のコメントを紹介します。

■第一部・第二部の総評

一部の全国から公募された夕日の映像、そして二部の留萌市内で撮影された作品をすべて拝見して、写真表現の楽しさ、そして深さを改めて認識しています。単なる自然現象である夕陽ではありませんが、地球誕生以来、同じ落日光景は二度と繰り返されていないはず。見えた有り様をそのまま記録することが得意な写真という表現が活躍する場です。レンズに工夫を凝らした作品も、また日常的に持ち歩くような一般的なレンズによる映像も、作者の視線にこの大自然の驚異をまじまじと見つめようとする姿勢がしっかりと見えてきている作品が数多くありました。

また二部作品では、郷土にむけられた眼差しが、写真的に美しく、そして楽しく発露されている映像を上位に選考することができました。質的に前回は越える作品が数多くあった今回のフォトコンテストでした。

■第一部グランプリ「夕日の丘」

暗く雲がたれこめたドラマチックな空。

雲の切れ間を通して見える沈み行く太陽と彼方の地上は霞んでいるが、そんな気象条件がまたこの光景のドラマ性を深めている。そしてもちろん、シルエットとなった群像がいなくしては、この夕陽物語は始まらない。カップル、家族連れ、そして一人ですら、顔を寄せ合う二人、手を挙げた男性。みな小さな姿ではあるが、一人ひとりをカメラがしっかりと見つめたことで、それぞれの思いまでが写し込められたようだ。

雲の部分に大きく配置したことで画面校正が安定した。

■第二部グランプリ「灯台と船灯跡」

レンズの前で黒い紙などを使って覆う、開けるを繰り返したのだから、ブルー一色の霧の中にファンタスティックな映像ができあがった。色調的には寒色がメインだが、船の赤と黄色のランプのゆつたりとした揺れが目に暖かな印象を与えている。旅心をかきたてる映像であり、また童画のようなやさしさが貴重だ。

▼平成9年度に「宇宙一の夕陽フォトコンテスト」と題して始まったこの企画。平成10年度から「日本一の夕陽フォトコンテスト」と改名されて2年目をむかえた今回、第一部作品(国内で撮影した夕陽・夕景)と第二部作品(留萌市内で撮影した留萌の良さ=名所・イベント)を合わせ878点の応募がありました。

応募作品は、写真家の秋山亮二氏によって審査され、入賞作品が決定しました。それでは、今回のコンテスト及び各部門に対する秋山氏のコメントを紹介します。

■第一部・第二部の総評

一部の全国から公募された夕日の映像、そして二部の留萌市内で撮影された作品をすべて拝見して、写真表現の楽しさ、そして深さを改めて認識しています。単なる自然現象である夕陽ではありませんが、地球誕生以来、同じ落日光景は二度と繰り返されていないはず。見えた有り様をそのまま記録することが得意な写真という表現が活躍する場です。レンズに工夫を凝らした作品も、また日常的に持ち歩くような一般的なレンズによる映像も、作者の視線にこの大自然の驚異をまじまじと見つめようとする姿勢がしっかりと見えてきている作品が数多くありました。

また二部作品では、郷土にむけられた眼差しが、写真的に美しく、そして楽しく発露されている映像を上位に選考することができました。質的に前回は越える作品が数多くあった今回のフォトコンテストでした。

■第一部グランプリ「夕日の丘」

暗く雲がたれこめたドラマチックな空。

雲の切れ間を通して見える沈み行く太陽と彼方の地上は霞んでいるが、そんな気象条件がまたこの光景のドラマ性を深めている。そしてもちろん、シルエットとなった群像がいなくしては、この夕陽物語は始まらない。カップル、家族連れ、そして一人ですら、顔を寄せ合う二人、手を挙げた男性。みな小さな姿ではあるが、一人ひとりをカメラがしっかりと見つめたことで、それぞれの思いまでが写し込められたようだ。

雲の部分に大きく配置したことで画面校正が安定した。